

スケッチ

中国経済

千葉 康弘 □ □ 3

位、外貨準備額で第一位の経済大国に成長し、世界の工場、世界の市場として認知されている。前者の理由は、所得格差が大きい、一部の富裕層を除き、農民あるいはリストラされた人たちは低所得で、購買力に乏しいことから発生する。後者の理由は国内の消費需要が不足するため、輸出圧力が働

筆者が中国を最初に旅したのは二十七年前の一九八一年であった。改革開放路線が導入されて三年目、その喜びが新聞トップ記事として躍っていた。「中国、進む混合経済、八十一万人が個人企業開く」「百万長者(万元戸訪問記)などだ。当時の人口は九億八千二百五十五万人(八〇年末)、うち農民が80%で、一人当たりのGDPは二百八十ドル。現在、人口は十三億人、うち70%の約九億人が農村部で暮らす。一人当たりのGDPは二千四百六十ドルで約八・九倍に増えている。

中国経済の構造は数年来、「外資主導し、マクロ好調」「内資停滞し、ミクロ低迷」という二面性を有しながら拡大してきた。一見、順風満帆に見える中国経済も、実は難

「貧富の差」拡大続く

光と影

問山積である。最 国民生活が改善されつつある一方、所得分配はますます不均衡を抱え、その不平等になっている。そのた

悪循環に陥る危険性をほらんめ、「都市」対「農村」「沿海部」対「内陸部」に加え、「富裕層」対「貧困層」という対立軸が新たに加わり、複雑化してきている。

昨年から発足した第二期目の胡錦濤政権は市場原理の導入によって生じたもろもろの影を「科学的発展観(人



河北省衡水市の道端でリンゴを売る老人。後ろは貨物専用自転車。3月30日、筆者撮影

七千円)を下回る」と公表(二〇〇七年)された。その数は四十万人に達している。三十年近く隔てた二つの中国の旅から、中国経済を正しく理解するためには光と影の複眼的な視点で評価することが大切と感じさせられた。

田市住) (河北師範大客員教授、秋

筆者は四年前から中国の地方大学に客員教授として出講